



サンゴは、えさをどうやってとっているの

サンゴは、クラゲやイソギンチャクの仲間

サンゴは、海岸の岩場などで見かけるイソギンチャクと同じ仲間です。ちがうところは、サンゴはたいてい、たくさん仲間が集まって、全体が一つの体のようになった「群体」とよばれるものを作っている点です。1ぴきずつのサンゴは、ポリプとよばれ、ポリプのまわりは群体のつながった肉や皮でおおわれ、ポリプどうしは、下の方で、たがいにつながっています。ポリプの底の部分には、かたい骨格ができ、これがくっつきあって、群体の中心を通る骨（軸骨）になります。サンゴの指輪やネックレスは、このかたい骨の部分から作られています。サンゴの種類によって、群体の形が、枝や、丸いかたまり、板のような形などになります。

えさは、口の周りの触手を動かしてとらえる

一つのポリプは、イソギンチャクと同じように、口の周りにはある6本とか8本（種類によってちがう）の触手をひらひらさせて、毒針で、プランクトンなどをとらえて食べています。こう門がないので、食べかすなどは、口から出します。

サンゴは、水温が急に変わってしまったり、水がにごったりすると、死んでしまいます。オニヒトデなどにおそわれて死ぬこともあります。（監修・安部 義孝）

サンゴの群体のしくみ

